どのような場面に直面しても対応できるよう、自らを理解し、他者と生きる力を磨く

恵泉女学園大学

（東京都多摩市）

多摩地域の豊かな自然に囲まれた恵泉女学園大学では、設立当初から、創立者である河井道が大切にした「聖書」「国際」「園芸」を正課に取り入れてきた。1年次にはキャンパス内の農場で取り組む「園芸」が必修。自らの口に入る物を生産することを学ぶ以上に、「ままならない自然を相手にする」ことから学ぶ意味は大きい。自らを知り、他者を知り、生涯にわたって働き続ける力＝生涯就業力の育成と支援を行う同大の取り組みを伺った。

豊かな自然に囲まれた
恵泉女学園大学キャンパス

園芸教育で育む「ままならないもの」に対する意識

昭和4年に河井道によって創設された恵泉女学園を前身とする恵泉女学園大学では、一貫して〝女性の自立〟を支援してきた。その教育の根本は、「聖書」「国際」「園芸」である。「聖書」では他者に尽くすことに喜びを見いだし、「国際」では世界平和に向けて女性として視野を広く持つことを目指し、「園芸」では命を育むことの難しさを学ぶ。

「本学で目指してきた〝女性の自立〟の根幹には、社会に出て、広くさまざまな物事に目を向けられる女性になるという精神がありました。現代においては、仕事を得て世の中に出て、社会の一員として自分の力で生きていくことこそが、本学の卒業生として実現してもらいたい自立だと考えています」と、キャリアセンター就職進路室の市川隆幸室長は言う。家庭に入る女性というよりは、それぞれに仕事を持ち活躍する社会人を育成することを、創立者から連綿と続く教育の目標としてきたのである。

「女性の人生は単純ではありません。さまざまな節目があり、その時々で、自分の人生を考え直すことになるでしょう。さまざまな機会がある中で、学生には〝どこにいても、なくてはならない人〟〝社会人として信頼される人〟になってもらいたい。そのための力を磨く4年間を提供したいのです」（市川室長）。

建学の精神をベースにしながら、そのためにカリキュラムの見直しを行い、卒業後の人生もサポートできる体制を整えている。

園芸教育では，学生同士がペアを組んで，1年間で10～20種類の野菜や花を育てる

特にユニークなのは、園芸教育だ。学科を問わず1年次の必修であり、キャンパス内の教育農場で野菜や花を育てるのである。

同就職進路室の豊岡直子さんは、園芸教育の効果を次のように説明する。

「二人一組で協力して植物を育てるのですが、作業の進め方などを相談しながら行動するため、相手に対する思いやりや責任感が生まれます。また、園芸は自然が相手ですから人間の思惑通りにいかないことも多々あり〝ままならないことがある〟と学ぶ機会にもなっていると思います」。

収穫した野菜は学生がそれぞれ持ち帰って食べるという。自分が口にするものを自ら作ることで、これまで何げなく購入していた野菜についても、それら手をかけて作った人がいることに思い至るようになる。入学時には土を触った経験のない学生も、1年かけて、そのようなことを実感していくのだ。自分自身にばかり目を向けるのではなく、周囲を取り巻くものに目を向けることの大切さを学び取るのだろう。対「自然」を学ぶことが、対「人」の在り方を学ぶ基礎にもなっているようだ。

キャリアセンター
就職進路室の
市川隆幸室長

キャリアセンター就職進路室の豊岡直子さん。自身も同大の卒業生。「学生たちはいわば“妹”のようなもの」と話す。「実の妹に接するように，親身に，ときに少し厳しく率直に声をかけています」

自分を知り、周囲に目を向ける。そこから始まる〝生涯就業力〟

同学では平成28年度に、新たな教育の理念として「生涯就業力」を掲げた。大日向雅美学長が提唱したものだ。令和元年度には、全学年を対象に新科目「生涯就業力ＳＴＥＰ」を開設。1年次（前期・後期）は「自分との出会い」、2年次（前期・後期）は「他者との出会い」、3年次（前期・後期）は「社会・世の中との出会い」、4年次（前期）は「自分に立ち返る」をテーマに、さまざまな講義を行う。例えば1年次は「リスクマネジメント」「時間管理」、2年次は「ＳＤＧｓ」「ロジカルシンキング」「プレゼンテーション」、3年次は「自己分析」「職種・業界研究」、4年次は「卒業生に聴く」「恵泉スピリット」などの講座が設定されている。

「社会に出ようと思えば、まず『自分とは何か』を考えることになります。次には、自分の周囲に存在する他者やそれらの人との関わり方について考え、さらには『自分はこれからどこに身を置くのか』と社会や仕事について考えることになります。それらを考える過程で、他者に物事を適切に伝えられる表現力やリーダーシップ、論理的な思考力などの必要性を理解し、そのスキルを習得していってほしい。段階を踏んでそれを身に付けさせようというのが『生涯就業力ＳＴＥＰ』です」（市川室長）。

「この教育を経て、その時々で自分がどのような場面、どのような時期にあるのかということが考えられるようになれば、卒業後にライフステージが変わっても、また思い描いたのとは違った状況になったとしても、〝今の自分には何ができるか〟が見出せるようになるのではないか。そのように期待しています」（豊岡さん）。

ＳＴＥＰには、就職進路室で行うキャリア支援（1・2年次）、就職支援（3・4年次）、資格取得支援も連動しており、ＩＴやビジネスマナーなど必須のスキルを身に付けるための課外講座も実施している。

「生涯就業力ＳＴＥＰ」で育成を目指すものの中には、日常的に取り組まなければ身に付かない内容も多い。

「それは例えばあいさつ、正しい言葉遣い、明るく元気であること、社会常識、コミュニケーション力などです。またロジカルシンキングやプレゼンテーション、リーダーシップなども、あらゆる機会で意識していなければ習得できません。これらは、その他の専門科目の中でも意識的に指導していただきたいと先生方にはお願いしています」（市川室長）。

最新事情 52……恵泉女学園大学

小規模大学ならではの距離感の近さを生かし、教職員が一体となって学生の指導に当たっている。

秘書検定で他者との関わり方の基礎を学ぶ

対人関係スキルは、生涯就業力育成の中でも大きなテーマだ。2年次には「コミュニケーション」「マナー」について理解を深めさせ、3年次にはビジネスの現場について学ぶが、ここで秘書検定が役に立つと市川室長は話す。

「秘書検定では、集団の中でどのように振る舞うのがよいかということが学べます。理解していれば周囲の人と気持ちよく働ける、そのための知識と技能が含まれていると思います。TOEICで英語力を、簿記で企業の経営や財務に関する理解を、MOS（マイクロソフト オフィス スペシャリスト）でITスキルを磨くのに加えて、秘書検定を学んでおいた方がいいと学生には常々伝えています」。

人間社会学部国際社会学科3年生の内藤美輝さん。3年生になってから秘書検定2級に合格。準1級も，基礎を積み上げていけば合格できそうだという自信が出てきた。「楽しみながらこつこつと学んでいきたいです」

秘書検定を受験する学生もそれを理解しており、就職に役立つからというだけでなく、学科学年を問わず、社会のことや会社のことを知らないから学んでおきたいという気持ちで取り組んでいるようだ。先輩から「受けておいたらいいよ」と勧められて受験する学生もいる。

就職進路室では、前期に6月の検定に向けて2級対策講座を、後期に11月検定に向けて準1級対策講座を開講している（90分×13回）。

「受講した学生は、きちんと学びを積み上げていけば合格できると実感できるようです。一夜漬けではできないこともあると知り、同時に、あきらめずにやれば達成できると分かることはとても大切。2級に合格した学生は『上位級も目指したい』『別の資格にも挑戦したい』と向上心を持ちますし、一度で合格できなくても、講座で勉強をやり遂げた学生にとっては、自信につながっているようです」（豊岡さん）。

人間社会学部国際社会学科3年生の内藤美輝さんは、今年の6月に秘書検定2級に合格した。

「就職を意識したときに、武器になるもの、自分の自信になるものがほしいと思い、秘書検定を受験しました。勉強してみると、冠婚葬祭の知識や、職場での振る舞い方など知らないことが多々ありました。中には、予想していた答えと違って戸惑う問題も。例えば『上司が気に入っている湯飲みを割ってしまったとき、どうすればよいか』。自分の立場だけで考えてしまうと、場の状況に合わないことがあるということが分かりました。疑問はその都度、講座の先生に質問して、納得できるまで解説してもらいました」と振り返る。社会人としての基礎知識が身に付き、当初の目標通り、就職に向けての自信がついたと話す内藤さん。次の目標は準1級だ。「学び方は分かったので、楽しみながらこつこつ積み上げていきたい」と笑顔を見せる。

「学生にはよく『私たちは講座を開いてよい先生を呼んでくることはできるけれど、実際にやるのは皆さんですよ』と話すのです。大人になっても勉強は必要。今のうちにしっかりとそのやり方を学んでおいてほしいと思っています」（豊岡さん）。

温かく、ときには厳しく見守ってくれる教職員の存在が、学生の成長を支えている。

正課でもディスカッションなどを多く取り入れ，専門的な知識だけでなく他者との関わり方を学び身に付ける